

打楽器を生かした基礎合奏についての考察

基礎合奏を実践してみえる吹奏楽団体は多いと思いますが、「打楽器をどうしたらいいだろう…」
「打楽器を生かした基礎合奏はできないだろうか…」という声を聞くことがあります。基礎合奏での打楽器は、現状ではメトロノームの代わりのようにただテンポを刻んでいるだけだったりします。もちろんそれがいけないということではないのですが、もっとうまく打楽器を生かす方法はないだろうか…

たとえば8分音符を含んだリズムが正確に演奏できるということは、8分音符単位のカウント（ビート）が演奏者の身体の中にあるということです。そうでなければ8分音符を含んだリズムは正確に演奏できません。次に16分音符を含んだ、たとえば符点のリズム。これが正確に演奏するためには、16分音符単位のカウント（ビート）が演奏者の中になければなりません。それを培う方法として、次の譜例のような練習をしてみてもどうでしょうか。

The image shows a musical score for a drum set and woodwinds. The score is in 4/4 time and consists of five measures. The top staff is for Low Wind (clarinet/saxophone), the second staff is for Timpani, the third staff is for Snare Drum, and the bottom staff is for Bass Drum and Cymbals. The woodwinds play eighth-note patterns, while the drums play a complex rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes.

管楽器は音階で符点のリズムを演奏します。スネアドラムがそのリズムの間に入り、かみあう。これがうまくいくためには、お互いを聴き合う以前に、それぞれの個々人の中に16分音符単位のカウントが流れていなければなりません。打楽器だけでもやってみる。ティンパニーとスネアドラムが結果的にきれいに噛み合うように。あくまで“結果的に”です。まずはゆっくりめのテンポで。管楽器も含めて、全員が、いわば16ビートを身体の中に持って演奏する。

このようにリズムの最小単位の音符をカウントする、それを促すような打楽器のパターンはほかにもいろいろ考えられると思います。『タータ』の3連符であったり、6/8のリズムであったり…。

また、打楽器セクションと管楽器セクションが交互にリズムを刻むような練習も効果があるかもしれません。管楽器にとっては一連の流れの中で吹いていない時間を取れる効果もあると思います。休符なしで吹き続ける練習は、あまり効果的ではありませんから。

リズムの練習を、単なる『タンギング練習』や『粒をそろえる練習』に終わらせるのではなく、もちろんそれも大切だとは思いますが、リズムの基本に流れているビート、カウントを感じる、培う練習とするのも効果的だと思います。それがなければ正確なリズムは演奏できないのですから。そのために、打楽器を生かす。そのやり方は、まだほかにもいろいろ考えられると思います。

ホームページアドレス <http://trb293.ie-yasu.com>

Twitter <https://twitter.com/fukurou293>

トロンボーン、作編曲、バンド指導／福見 吉朗